発達支援サポーター等育成研修
「地域連携講座」

埼玉県発達障害総合支援センター主催

発達障害への作業療法

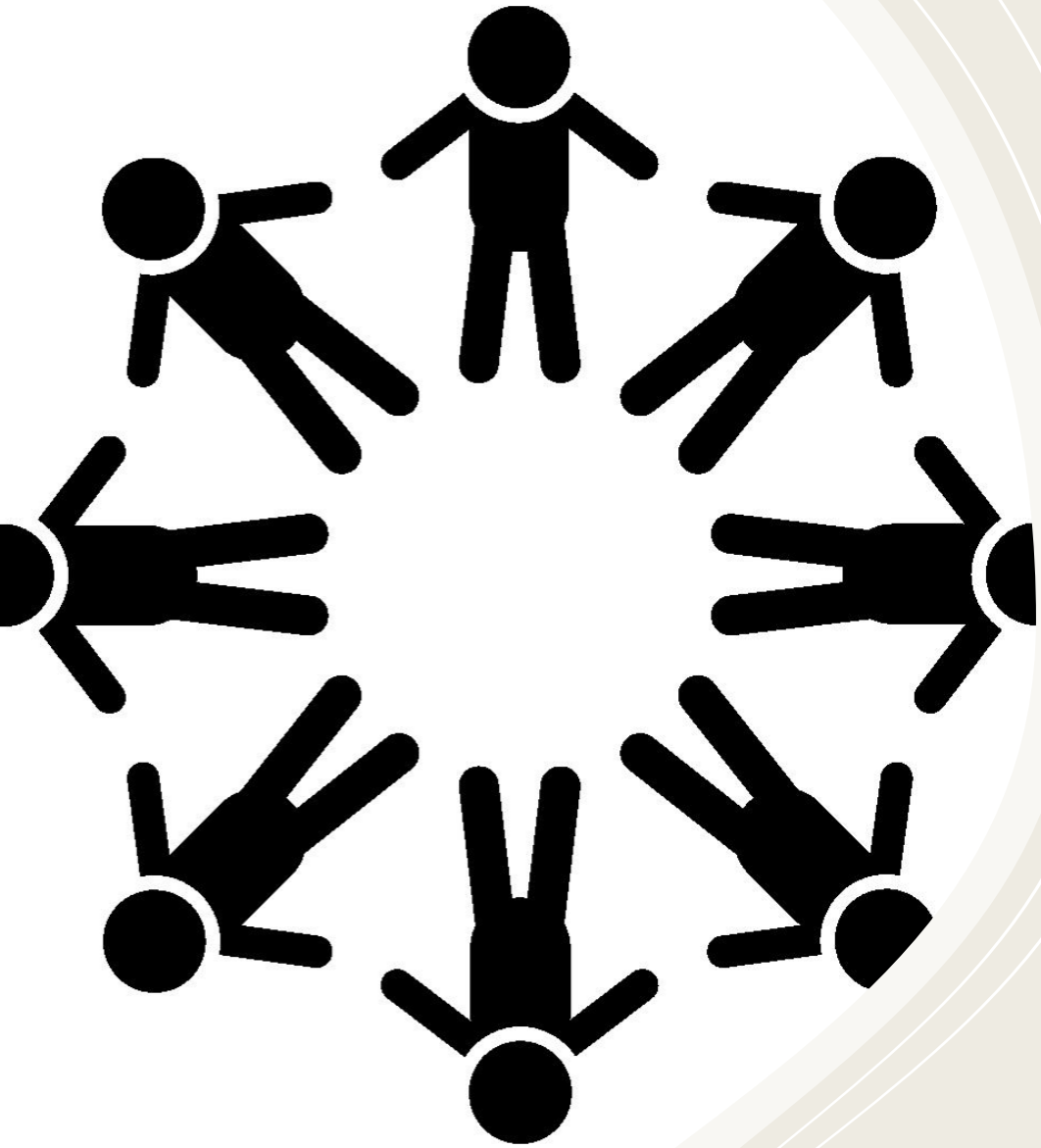
発達障害を有する子どもへの
作業療法の視点による発達の援助

埼玉県立小児医療センター　保健発達部
作業療法士　岡田洋一

研修の目的

- 発達障害を有する子どもへの発達支援とは何かを再確認

- 作業療法の視点、見方を知っていただくことで、日常の子どもへの関わりのなかで発達支援に活用していただくこと

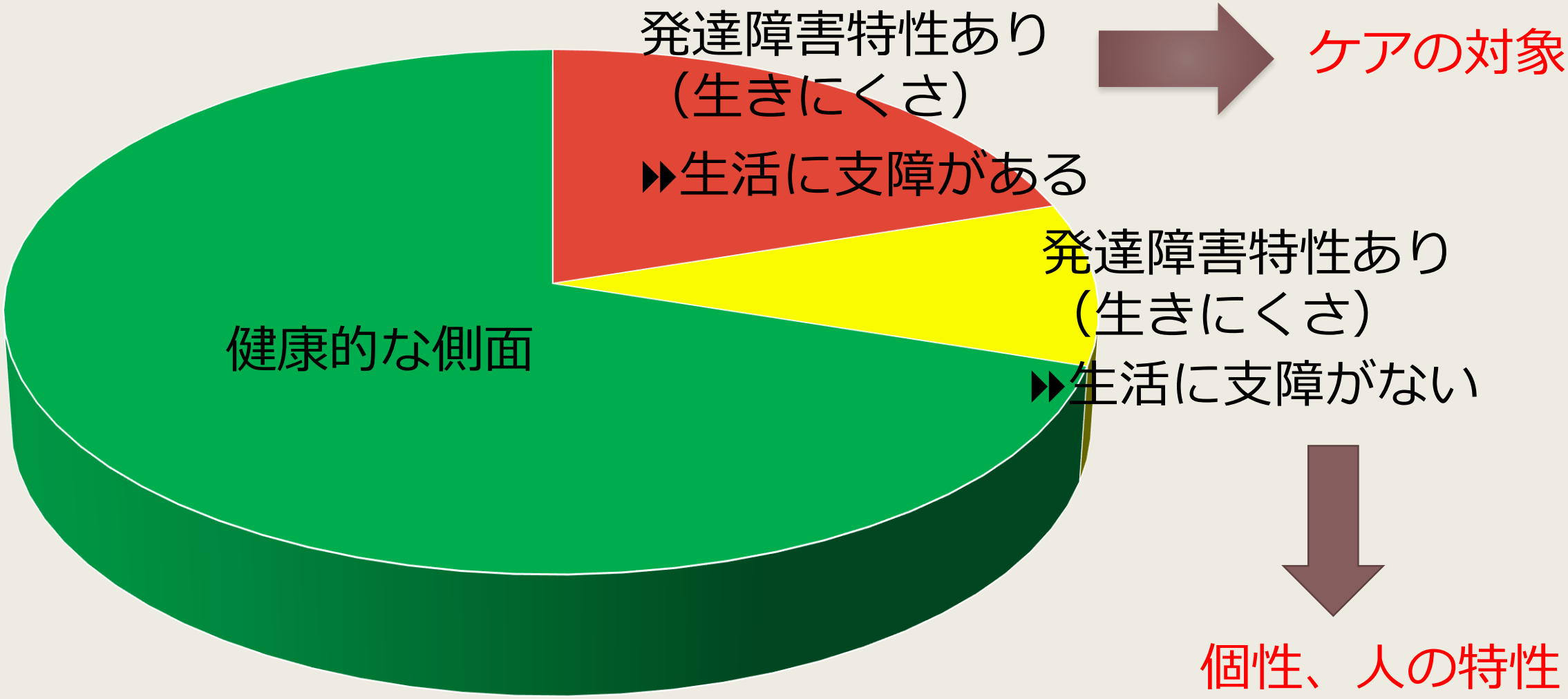


共有
したいたこと

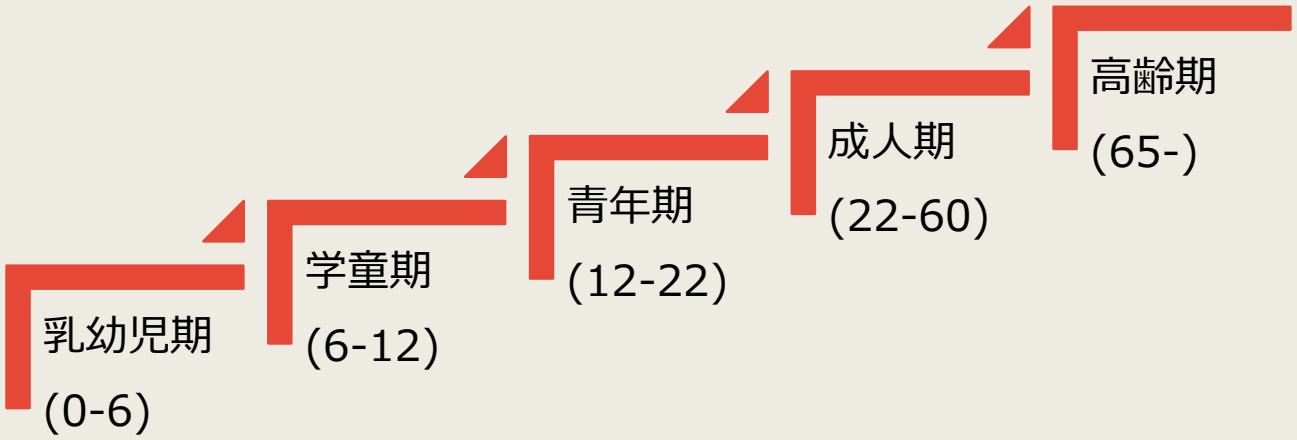
❶

「発達障害を有するお子さん」という表現

人には健康的な側面
と
生きにくさの側面がある


発達障害特性あり
（生きにくさ）
▶▶生活に支障がある
ケアの対象
発達障害特性あり
（生きにくさ）
▶▶生活に支障がない
健康的な側面
個性、人の特性

「生きにくさ」は
ライフステージや生活環境によって異なる



養育者の価値観
養育環境

所属している集団

学習に力を入れる

運動に力を入れる

幼稚園

保育園

自然との触れ合いを大切にする

発達支援事業所

普通学級
特別支援学級
特別支援学校

ただし

- ご本人やご家族が困らなくても、発達をさまざまな側面から評価し、**将来的に困りごとや生きにくさが生じることが予測される場合**（支援者の視点、発達評価、健診等）

- 主には医学的な診断を提供することによって、**支援の必要性を明確にして**発達支援のスタートをすることはとても重要なこと

❷

発達支援を再確認する

❷

発達支援を再確認する

発達支援という用語

- 療育（高木憲次先生提唱）≒発達支援
- 医療、教育、職業訓練による社会的自立を目指す
- 高松鶴吉氏が療育の対象を全ての障害を有する子どもへ
- さまざまな法律が制定され、平成15-16年の厚労科研の中で「療育」の概念をさらに発展・拡大させたものとして「発達支援」を定義

発達支援という概念の発展
（全国発達支援連絡協議会　発達支援の指針）

- 対象を障害の確定されていない子どもにまで拡大
- 育児支援や家族支援も包含する
- 「障害があっても育ちやすい、暮らしやすい地域づくり＝地域支援」の概念までを包含

発達支援の定義

①「障害の軽減・改善」という医学モデルの支援と地域・家庭での育ちや暮らしを支援する生活モデルの支援

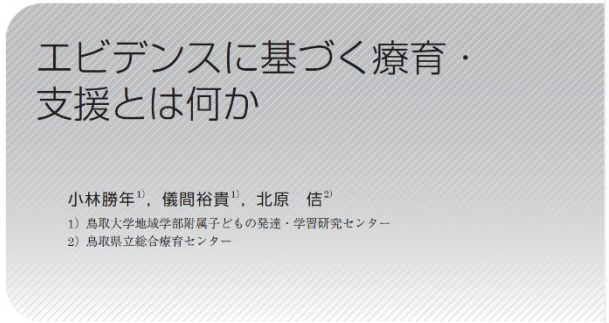


表１　医学モデルと生活モデルの比較

	医学モデル	生活モデル
目的	治癒，救命	生活の質の向上
目標	健康	成長・発達
対象	疾患	子ども
主たる場所	病院・施設	家庭・地域社会
チーム	医療従事者	多職種
指示形式	命令	協力
対象の捉え方	病因–病理–症候	機能障害–活動–参加

（広井良典：ケア学，医学書院，2000, p. 37より一部改変）

発達支援の定義

② 障害が確定しない段階の子どもも対象

・意外に多い「気になる子ども」

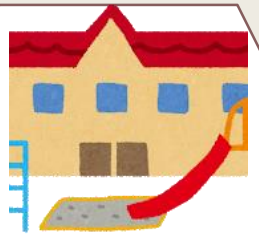
例　ご両親の**見立て**と集団での**見立てが一致しない**

発達支援の定義

③ 発達支援の基盤となる家族への支援や保育所等の地域機関への支援も視野に入れる広い概念

就学前の地域支援の構図
埼玉県の場合

保育園



幼稚園

支援事業所

保健センター
行政

埼玉県：
地域療育
センター

教育センター

医療機関
療育センター

埼玉県
発達障害
総合支援
センター

発達支援の定義

④ 障害のある子ども（またはその可能性のある子ども）が地域で育つ時に生じるさまざまな課題を解決していく努力のすべて

発達支援の定義

⑤ 子どもの自尊心や主体性を育てながら発達上の課題を達成させ、

⑥ その結果として、成人期に豊かで充実した自分自身のための人生を送ることができる人の育成

発達支援の定義

⑦ 障害のある子どもの育児や発達の基盤である家庭生活への支援（家族支援）

⑧ 地域での健やかな育ちと成人期の豊かな生活を保障できる地域の変革（地域支援）を包含した概念」と定義される。

発達支援の定義

⑨ 発達支援の目標は、単に運動機能や検査上に表される知的能力の向上にとどまらず、

発達支援の定義

⑩ 「育つ上での自信 や意欲」、「発話だけに限定されないコミュニケーション能力の向上」、「将来的な地域生活を念頭に入れた 生活技術の向上」、「自己決定、自己選択」などをも射程に入れることであり、換言すれば「障害のある子 どもと家族のエンパワメント」である。

作業療法の視点

作業療法の視点

作業療法　Occupational Therapy=OT

理学療法　Physical Therapy=PT

言語聴覚療法　Speech Therapy=ST

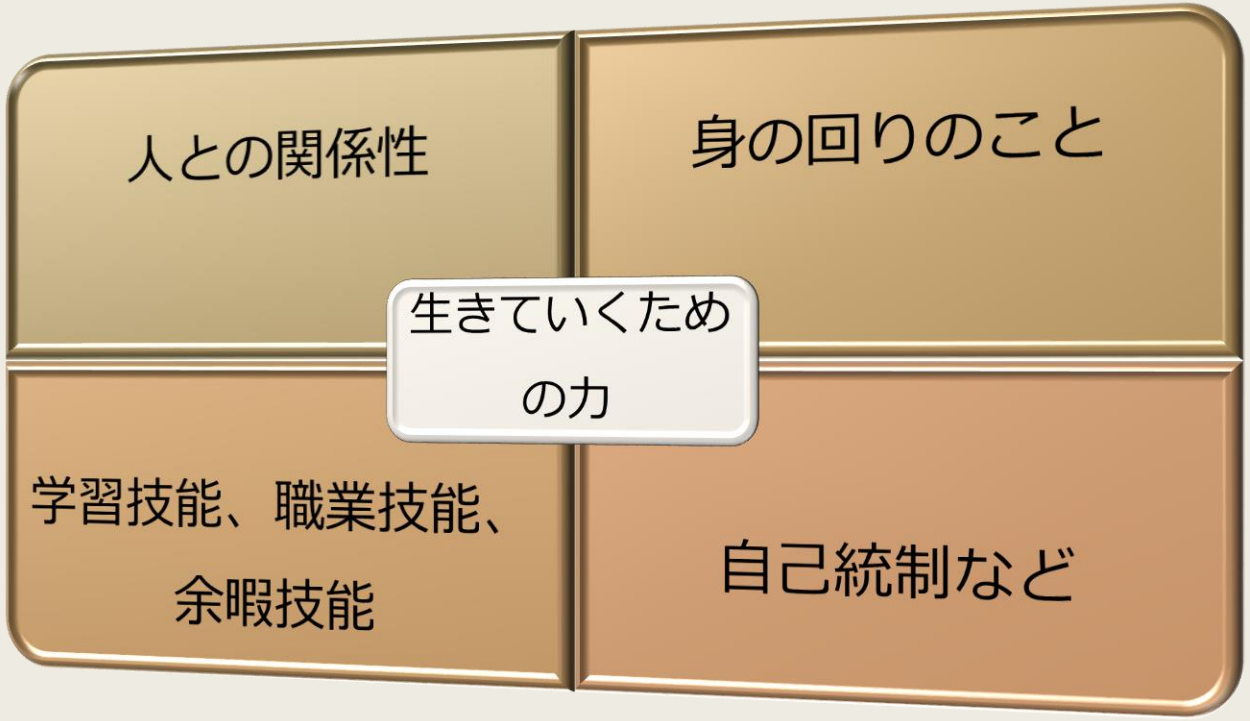
生活環境における適応にロックオン！

作業療法の定義

- 作業療法は、人々の健康と幸福を促進するため
- 医療、保健、福祉、教育、職業などの領域
- 作業に焦点を当てた治療、指導、援助
- 作業とは対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為

「人は作業を通して
健康や幸福になる」が基本理念

Q　生きていくための力って？



どのような能力によって
この「生きていくための力」が遂行されるのか？

運動機能	感覚-知覚-認知機能	心理機能	社会機能
筋緊張	感覚の調整	情緒	二者関係
姿勢反応	触知覚	感情	集団関係
粗大運動	視知覚	動機意欲	社会的規則
微細運動	空間知覚	自尊心	役割
	身体図式	自信	コミュニケーション能力
	身体両側統合	自己概念	
	運動企画	自己抑制	
	言語		
	教科学習能力		

作業療法の視点で
理解する
子どもの
行動と支援

これからお話することは

I. 作業療法において、発達に障害を有する子どもたちの発達課題として取り上げられることの多い症状や行動についてご説明します

II. その原因、対処方法は非常に個別性が高いので、これから説明することが全てではありませんので、ひとつの視点としてご理解いただきご活用ください。

【ことばが遅い】

★現象

　養育者や保育者からの訴えが非常に多いもののひとつです。言葉の遅れについては、発達年齢や障害種別、障害程度、知的水準などによって、その状況、状態はさまざまですが、今回は遅れが発見されやすい２-3歳をイメージしてお話します。

【ことばが遅い】

★現象

　自分の好きな遊び方を何度も繰り返し、黙って黙々と遊んでいます。その遊びに他者が入ると拒否され、一緒に遊ぶことが出来ないためコミュニケーションにならず、言葉を使いません。要求がある場合には目を見ずに人の腕をつかみ、言葉を使わずに必要な場所に連れていきます。

【ことばが遅い】

★原因

　発達障害を有するお子さんにとっては、人の存在に気が付きにくい発達期であり、なおかつ、感覚遊びを中心として遊びが展開されるため、自分自身が関心を持った対象のみしか注意が向きません。相互的なコミュニケーションをとる機会が最小限なため、理解も表出も言語発達としてはゆっくりな時期となります

人への関心が薄い

人に気がつきにくい

一人で遊ぶことが好き

自分のペースで
遊びをイメージ通りに遊びたいので

人が介入すると

邪魔をされたと感じる

大人の手を払いのけたり
人のいない場所に移動したりする

人と関わる必要性の低さ

★要求や手助け

★共感

不要

コミュニケーションの必要性が
高まらない

ことばの遅れに
拍車をかける

【ことばが遅い】

★支援や対応

少し雑な言い方ですけれども、お子さんが一人で遊んでいる遊びより楽しい遊びを見つけることです。その遊びが見つかったら支援者と一緒に行うと、より楽しいという状況を作り、子どもにその遊びを要求してもらうような流れを作っていきます。この年齢の時には感覚遊びや感覚運動遊びに反応しやすいので、これらの活動を媒介としてやりとりに発展させられると、言葉に発達につながることがあります

【体の動きが慎重なお子さん】

★現象

　高いところに登ることや体のバランスを必要とする活動を苦手とします。お友達に背中を押される、手を引かれて走ることが苦手です。自分自身が調整して動くことは出来るものの、人に動かされることを強く嫌うお子さんもいます。

【体の動きが慎重なお子さん】

★原因

　体を支える骨格筋の発達がゆっくりで、目的動作を行う際に体を支えられないことや、動きの感覚（前庭感覚や視覚）に対する感度が高く、必要以上に恐怖を感じてしまうことなどが原因として考えられます。

【体の動きが慎重なお子さん】

★影響

　体を動かす遊びに対して消極的になります。お友達の遊びを見ていることが多くなり、結果的に自分で出来る遊びが広がらず自信を持ちにくくなります。また体を使った遊びにおけるお友達との接点も少なくなってしまいます。

【体の動きが慎重なお子さん】

★そのほか

　このタイプのお子さんは、外の環境を扱うことが苦手なので、養育者と一心同体になりやすく依存度が高くなり、人見知りや場所見知りなどの様子を示すことがあります

【体の動きが慎重なお子さん】

★支援や対応

　強引に体験させることは、更なる恐怖心を生むことになるので、子どもが自ら動く環境を作ることが重要です。登る、動く事を直接的な目的とせず、大好きなものを取りに行く途中に、少しだけ高さのある物を越えていく、少しだけバランスを必要とする遊具を通過するなど、運動的な課題とするものを直接的な目的としないほうが良い場合があります。スモールステップで体験することが重要です。

【動きが激しい・活発すぎる】

★現象

　一か所に留まることが出来ず、ホールや広場などの空間を見ると走り出してしまう場合があります。机上での活動が苦手であり、離席が頻回に起こります。また一つの遊びや物、玩具への関わりの持続時間が短く、遊び方も表面的になります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★原因

　物を見るという視覚刺激によって行動が引き起こされてしまうような易刺激性が存在している場合があります。また体が動くことによって生じる固有感覚（運動覚や位置覚）や前庭感覚などの感度が高い為、激しく動かないと自分が動いているという感覚を得られにくい可能性があります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★原因

　一つの遊び、玩具操作への遊び込み方が浅く多様性がない場合があります。結果的に遊びの対象が次から次に移り変わってしまい、動きが活発すぎるように見えることがあります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★影響

　このタイプのお子さんは、大人から見ると落ち着かない感じに映り、叱責を受けやすく自己イメージが低くなりやすいと言われています。また身体運動の調整が苦手で、どちらかと言えば運動の出力が高くなるので、物や人への関わりが雑になり暴力的に見えることがあります。目的とすることが失敗に終わることが多いので、物事に対して長続きしにくいこともあります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★影響

　また動くことによって、周囲からの言葉かけの一部しか捉えられず、「言われた通りに行う」ということが苦手なお子さんもおられ、結果的には指示に従えず叱責されやすくなる状態になってしまいます。

【動きが激しい・活発すぎる】

★対応や支援

　活発に動いても良い時間や空間を確保してあげることで、「少し我慢する時間」と「活発に動ける時間」のメリハリをつける方法も良いかも知れません。体の動きが鈍感なので、例えば上り棒や、滑り台の滑走面を逆から上る動き、足元が揺れるような遊具のように体の感覚が強く入るような遊具を選択することも効果的な場合があります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★対応や支援

　「そっと触る」「やさしく持つ」などの動きの調整に関する言葉は理解できにくいことがあるので、手取り足取り、動きを誘導しながら言葉を添えて学習してもらう方法も良いと考えられます。また動き始める前に、次の指示を出すなどによって不適切な行動を抑えることが出来る場合もあります。声掛けをするタイミングが重要になります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★対応や支援

　またこのタイプのお子さんはご家庭でも集団でも怒られることが多いので、不適切な行動を示しているときにはネガティブな言葉を使わずに、例えば、支援者が体に触れながら、具体的な行動を指示し、少しでも従えた場合には、そのことを褒め、どのような行動をすると評価されるのかについて学習を積み重ねることが大切です

【動きが激しい・活発すぎる】

★対応や支援

　短い時間でも１か所に留まった際に支援者が寄り添い、留まった場所で展開されている遊び方のバリエーションを提案してあげるという方法もあります。子どもにとって、それが面白さに繋がれば、一つの活動の展開が複雑になり活動持続性が高まることにつながります。

【動きが激しい・活発すぎる】

★対応や支援

　学習課題や製作などの時間になると離席行動が多い場合には、その課題内容を見直し、難易度を調整することによって離席行動が抑制される場合があります

終わりに